



日本植物病理学会ニュース 第1号

(1995年2月)

日本植物病理学会ニュースの発行に寄せて

日本植物病理学会長 加藤 肇

「俺は学会をなめていた」。初めて春の大会に出席した学生達の会話で聞かれた感想の一言である。表現は無礼で、活字にするのも憚られるが、彼らを出席させて良かったと思っている。学問のありようの一端を理解さすことができればと願ってのことだった。一般に、大会、部会、談話会などに出てみて初めて学会の存在意義を感じることができるのでないか。気楽に酒を酌み交わす先生も、学会で見ると違って見えようというものだ。

学会誌の重要性は論を待たないが、これだけでは学会を身近に感じられない人も多いと思う。学会活動の多面性については、長年学会と付き合って来られた方々でも、不明確な点が多いと思う。

学会員の多くが国公立機関、民間・法人研究機関や普及機関などに属しているにもかかわらず、評議員は大学関係者が多いという伝統的アンバランスも影響しているのではないか。

少しでも会員間の風通しを良くしようとの願いから、今回ニュースを発行(試行)することになった。Eメールの時代に、いささか遅きに失した感もあり、方法についても今後検討が必要だろう。いずれにしても、編集者に人を得なければ不可能。幸い、前会長土崎氏がお引き受け下さった。処女航海も順風を得たと言ってよかろう。

学会員のために発行するのであるから、生かすも殺すも皆様の関心次第である。学会はボランティアの幾許かの犠牲で成り立っている。自らもその一翼を担うつもりで、身近の関連情報を気軽に寄せいただきたい。

ニュース発行に至る経緯と今後の予定

平成4年度日本植物病理学会の浅田泰次会長は、学会と会員の間の連絡を密にしたいと、ニュースの発行を幹事会に提案された。これを受けて幹事会は評議員に対し、ニュースの発行の是非を4年～5年度にアンケート調査した。その結果、平成5年度の評議員会で平成6年度より2年間のニュースの発行の試行が決定された。発行は年2回とし、数頁程度を学会報の1号と4号に色刷りで入れる方針である。なお、平成8年度以降のニュースの発行については、平成7年に改めて評議員の意見を聞き決定する予定である。

ニュースの編集方針と編集委員会

(I) 編集方針

- (1) 学会報本会記事よりニュースへ移行する記事
 - 1) 国内外の関連学会の学会、シンポジウムの開催案内
 - 2) 出版物の案内—防疫協会、会員の病理関連出版物の案内

- 3) 寄贈図書の案内
- (2) 本会記事と重複して掲載する記事
 - 1) 学会主催の部会、談話会、研究会の開催案内と開催報告
 - 2) 学会の出版物（名簿、病名目録、総目次など）
 - (3) 新たな記事
 - 1) 学会事務局の紹介—幹事及び事務員の氏名及び異動など
 - 2) 学会各委員会の連絡事項
 - a) 編集委員会（編集状況、お知らせなど）
 - b) 病名委員会（編集状況、お知らせなど）
 - c) その他の委員会
 - 3) 会員の動静（会員の入会、脱退、死亡は本会記事で）
 - a) 農水省研究機関および県農試の病理関連の室長以上の昇任及び人事異動
 - b) 大学の植物病理関連研究室の助教授以上の昇任及び人事異動
 - c) 大学、農水省などの新規採用
 - d) 大学博士課程の学位取得卒業者（課程以外の論文博士は除く）
 - e) 会員の海外への長期出張（10カ月以上）
 - f) 外国人研究員の日本国内滞在日程（6カ月以上）
 - 4) 会員の意見（400字以内）
 - a) 学会運営への注文や学会主催の講演会・出版物に対する感想など（自由投稿、場合により依頼）
 - b) 紙面の制限などもあり採択の有無は編集委員会で決める
 - 5) 学会主催の記念行事の紹介（例：80周年記念事業）
 - 6) 国際植物病理学会、国際植物保護会議などの動向
 - 7) 植物病理学関連の国際会議報告
 - 8) 本会会員の関連学会における受賞
 - 9) 外国研究機関訪問記あるいは留学体験記（800字以内、依頼あるいは投稿）
 - 10) 大学、農林水産省の海外協力プロジェクトの紹介

(II) 編集委員会
委員長：ボランティア、委員：学会庶務幹事長、学会庶務幹事(1名)、ボランティア若干名で構成し、ボランティアの任期は2年、2期まで可。
平成6年～7年度の編集委員会
委員長：土崎常男（ボランティア）
委員：八重樋博志（学会庶務幹事長）、門田育生（学会庶務幹事）、日比忠明（ボランティア）

学会事務局紹介

平成6年度の定期総会において新旧幹事の交替が行われ、本年度は八重樋博志氏（庶務幹事長）、門田育生氏、加納健氏、竹内妙子氏（庶務幹事）、柏崎哲氏（会計幹事）の

5名が担当することとなりました。ご支援ご協力をお願い致します。平成4年度と5年度の2年間幹事を担当された日比忠明氏（庶務幹事長）、土屋健一氏（庶務幹事）、夏秋啓子氏（庶務・会計幹事）のお三方には大変ご苦労さまでした。

また、学会事務局の事務員は鈴木弥江子氏と鶴見典子氏のお二方で、そのほか前野敦子氏にパートとしてお手伝い頂いております。これまでどおり3人で日本農薬学会、日本応用動物昆虫学会および日本植物病理学会の事務全般を担当して頂いております。いずれも3学会のこと精通した方々ですので、何なりとお問合せ下さい。

平成6年度前期学会活動状況

1. 地域部会

1) 開催状況

北海道部会：平成6年11月7日～8日

北方圏センター会議室（札幌市）

東北部会：平成6年10月6日～7日

遊学館（山形県生涯学習センター）

関東部会：平成6年9月22日

宇都宮大学

関西部会：平成6年10月21日

倉敷市芸文館

九州部会：平成6年9月21日～22日

諫早市市民センター

2) 開催報告

九州部会：

平成6年度日本植物病理学会九州部会は、九州農業研究会との共催で、9月21日(水)、長崎県諫早市にある諫早市民センターで行われた。講演題数は24題で、終日熱心な発表と討論が行われた。翌日、22日(木)には第19回を迎えた恒例の九州部会シンポジウムが開催され、ウイルス関連2題と糸状菌関連2題が発表され正午盛会裏に終了した。

なお、初日の午後に行われた幹事会において、次期部会長に鹿児島大学の荒井啓氏が選出されたほか、宮崎県が次回の開催地に選ばれた。

一方、九州地区で担当することが既に決定している平成8年度の全国大会は佐賀大学にお願いすることで了承が得られた。

(松山宣明)

関東部会：

関東部会は千葉大学園芸学部平野和彌部会長の任期満了を受け、平成6～7年度は宇都宮大学農学部奥田誠一部会長の下で運営されることとなった。前回(昭和55～56年度、若井田正義部会長)お引き受けして以来12年ぶりとなる。本年度部会は、平成6年9月22日宇都宮大学大

学会館で開催された。会館は昨年11月に竣工したばかりで、そのホールは自動繰出し式の階段座席が設置され、補助椅子と合わせ280人余りを収容できる。今回は、例年と同程度の49題の講演があり、時間が窮屈なのは相変わらずであったが、9時30分から開始し、わずか40分の昼休みをはさんで休憩なしで進行し、全講演を終えたのは18時15分であった。参加者総数は約220名を数えた。昼休みには、飯田 格名誉会員、若井田正義永年会員をお迎えして役員会が開かれたが、とくに審議すべき事項は提示されなかった。夕刻には、生協食堂で、約70名の参加を得て懇親会が開かれた。まず若井田名譽教授から歓迎の挨拶があり、次に、部会長から、折しも来学中の中国浙江農業大学(杭州市)張炳欣教授(植物病理学・国際交流所長)が紹介され、寺中理明名譽教授の音頭で乾杯後開宴した。なごやかな歓談が8時近くまで続いて終了した。

(奥田誠一)

東北部会：

平成6年度東北部会は創立30周年の節目の年に当たるため、記念大会として10月6日(木)と7日(金)山形市遊学館で開催された。一般講演(32題)の他に記念事業として記念講演会と記念パーティが開催され、さらに部会創立30周年記念誌「東北地方における作物病害研究の歩みと展望」が刊行された。記念講演会では、東北大名譽教授山中達氏が「東北部会創立当時の頃」、東北農業試験場齊藤初雄氏が「平成5年イネの大冷害といもち病の発生様相」、東北大農学部羽柴輝良氏が「欧米諸国における最近の植物病理学研究事情」の各演題で講演し、大会参加者(114名)に深い感銘を与えた。大会初日の夜に開催された記念パーティには名誉会員、永年会員、歴代部会長の諸先生も多数ご出席され盛大に挙行された。また、記念誌は84名の会員が執筆し、東北全般、東北各県の植物病害発生の変遷と現状の紹介、今後の植物病害研究の展望を主な内容とし、総頁数が280頁に及ぶものとなった。部会総会では、会務報告、学会・各種談話会の開催状況、学会の近況、東北部会の状況、収支決算等の報告がなされた。その後、次期部会長に羽柴輝良氏を満場一致で選出し、新部会幹事、次期開催地(秋田県)を承認して本年度の部会は終了した。

(富樫二郎)

関西部会：

- (1) 開催場所：倉敷市芸文館(倉敷市中央1-18-1)
- (2) 開催日時：平成6年10月21日(金)
- (3) プログラム：演題数87 特別講演1(D. Mills博士
オレゴン州立大)
- (4) 出席者数：308名
- (5) その他特記すべき事項：演題数が多く、発表時間を

短縮せざるを得なかった。

(6) 地域部会総会および評議員会報告：

10月20日午後3時より役員会を開催し、庶務・会計報告を承認した。部会会則に基づく選挙結果から平成7年度部会長に井上成信氏が当選したことについて報告、了承された。平成7年度開催地として大阪府立大学を、また、開催地委員長には一谷多喜郎氏を選出した。これに伴い、部会事務幹事に前田孚憲氏、開催地幹事に尾崎武司氏が推薦された。これらの案件は総会において報告、承認された。関西部会所属学会員数は600余名(平成6年10月1日現在617名)に達していることから部会を分割することについて約1/3の会員を対象にアンケート調査した結果、分割反対の意見が多数(約2/3)を占めたため、部会の分割は当分の間見合わせることとなった。

(大内成志)

北海道部会：

北海道部会の研究発表会は11月8日、札幌市の北方圏センターで約100名が出席して開催された。講演数は23課題で例年より若干少なかった。講演の病原別数は、ウイルス5、ウイロイド1、細菌2、放線菌5、糸状菌10課題であった。そのうち新発生病害、ジャガイモそうか病関連の発表がそれぞれ5、4課題あった。昼休み後に開催された総会では庶務、会計報告が承認され、部会長は北大農学部の木村郁夫教授が退任され、北海道立中央農試の土屋貞夫病虫部長が新たに選出された。また、7日にはシンポジウム形式の談話会が『植物病理学と作物育種の接点』というテーマで開かれた。実際に育種を担当した人を含め若手4名から話題提供をお願いした。抵抗性品種育成にあたって育種からみて病理に望むこと、病理分野のなすべき役割などについて活発に論議された。

なお、当部会には発足当時から談話会が開催され、現在までに通算155回となっている。外国、および道外から著名な先生が札幌に見られたとき講演をお願いしたり、会員の研究内容の紹介や外国へ留学、出張したさいの帰国報告会などをその都度開催している。一昨年11月からは、国内の大学から4名、外国から3名の先生による講演会など6回開催した。昨年7月には札幌市で植物感染生理談話会が開催され、部会としても積極的に協力し、多くの会員が参加され成功裡に終了した。

(島貫忠幸)

2. 談話会、研究会

1) 開催状況

感染生理談話会：平成6年7月20日～22日

テルメインターナショナルホテル
(札幌国際会議場)

土壤伝染病談話会：平成6年11月10日～11日

大阪府立大学学術交流会館

バイオコントロール研究会：平成6年4月6日

農林水産技術会議筑波事務所（つくば市）

殺菌剤耐性菌研究会：平成6年4月6日

農林水産技術会議筑波事務所（つくば市）

2) 開催報告

感染生理談話会：

本談話会は今年、30回目の記念すべき年に当たり、7月20～22日に札幌市テルメインターナショナルホテルで開催された。本年のテーマは「植物疾病におけるGene for Gene説の分子的基盤」で、10講演と3特別講演が行われた。

第1日目、初めに谷利一氏が基調講演として「感染生理学30年の歩み」を話された。次いで「病原菌の非病原性および病原性遺伝子について」はまずN.T. Keen氏(加州大)が「植物病原体の病原性と非病原性遺伝子」について総論的に話され、次に林長生氏らによる「いもち病菌の非病原性遺伝子のマッピング」、続いて拓植尚志氏らによる「*Alternaria alternata* 病原菌の病原性の分子解析」、最後に奥野哲郎氏による「病原性および非病原性因子としてのプロムモザイクウイルスの外被蛋白質遺伝子」が講演されて、1日目は終わった。第2日目(特別講演)、まず内宮博文氏の「*Agrobacterium rhizogenes* Riプラスミドのrol遺伝子の分子・細胞学的解析」があり、次いで竹葉剛氏による「高等植物に広く存在する花芽形成誘導タンパク質」が話され、最後に桜田教夫氏による「エイズウイルスの生物学」が話された。すべて植物病理学の関連分野の講演であり非常に興味深く拝聴した。午後は親睦交流スポーツとしてゴルフとテニスが行われた。第3日目は「植物の病害抵抗性遺伝子」について5講演があった。その内容はイネのいもち病抵抗性遺伝子のクローニング(川崎信二氏ら)、トウモロコシのトランスポゾンによるイネいもち病抵抗性遺伝子の単離(島本功氏ら)、イネ縞葉枯病抵抗性遺伝子の解析(早野由里子氏)、*Pseudomonas syringae* の非病原性遺伝子に対するダイズ抵抗性遺伝子のクローニング(竹内洋二氏ら)およびトマトの根コブ線虫抵抗性遺伝子のクローニング(高木正道氏ら)であった。

以上3日間の出席者は約200名で盛会裡に閉幕した。来年度は静岡大(代表者 露無慎二教授)で計画されることが決定され、益々の発展が期待される。(木村郁夫)

バイオコントロール研究会：

バイオコントロール研究会は、脇本哲先生の提唱によ

り今後研究推進を図るべき部門である病害の生物防除をめざして1989年に日本植物病理学会の談話会の一つとして設立された。本研究会は隔年開催を原則とし、第4回研究会(1994年)は平成6年度日本植物病理学会大会の後、農林研究団地筑波事務所農林ホール(つくば市)において246名の参加者を得て開催された。

今年の主テーマは、「微生物農薬の実用化をめぐる諸問題」として、1)微生物農薬開発の現状(セントラル硝子・高原、野菜・茶葉試験場・築尾、トモノアグリカ・伴野、農環研・松本、蚕昆研・佐藤)、2)生物防除利用微生物の効能とリスク(生物研・土屋、国立衛生試・三瀬)、3)カレント・トピックスとして一雑草防除のための微生物農薬開発の現状(三井東圧化学・郷原、JT・山田)の3サブテーマを設け、それぞれホットな話題が紹介された。今回の研究会の主旨は、これまでに得られた多くの生物防除に関する研究成果を具体的な微生物農薬として利用していく場合に何が問題で、どこを解決しなければならないか、このためにはどのような研究が要請されているかを先進企業における具体例を交えて論議することにあった。農林水産省においては微生物農薬のガイドラインが検討され、環境庁においても微生物農薬の動態を検討しようとしている今、研究会の主旨が理解され今後の発展につながることを願っている。(鈴井孝仁)

第17回土壤伝染病談話会:

日本植物病理学会第17回土壤伝染病談話会は全国から215名の参加者を迎えた。平成6年11月10~11日の日程で、大阪府堺市の大坂府立大学で開催された。民間からの参加者が約半数にのぼり、この分野への民間企業の関心の高さがうかがえた。

初日の講演会では、片山新太氏(名大農)による特別講演「農薬施用による土壤微生物相の変動—非標的微生物への影響を中心として—」、草刈真一氏(大阪農技セ)による「大阪府における土壤伝染病の現状と問題点」のほか、「生態学的研究から無公害管理へ」と「予防・管理への新しいアプローチ」の2大テーマのもとに、松尾和敏、伊達寛敬、景山幸二、梅本清作、寒川喜三郎、東條元昭、竹原利明、玉田哲男、豊田秀吉、山田明の各氏から多方面にわたる話題が提供され、活発な討論が行われた。翌日の現地検討会では、泉大津市の「大阪泉大津フロワーセンター」でコンピュータによる花卉せり売りシステムなどを見学したあと、泉佐野市圃場でキャベツ根こぶ病の有機質資材による防除試験と養液栽培ミニトマトの昆虫による受粉、天敵による防除試験の状況を観察、検討した。

今回の談話会の運営委員は、一谷多喜郎(委員長)、大木理、尾崎武司、岡田清嗣、瓦谷光男、草刈真一、田中

寛、東條元昭、中曾根渡の各氏である。現地検討会でお世話になった関係各位にもご協力を改めて感謝したい。なお、次回平成8年度の土壤伝染病談話会は千葉県で開かれることが決まった。また、講演要旨集(土壤伝染病談話会レポート第17号)には若干の残部があるので、ご希望の方はご連絡をいただきたい。(一谷多喜郎)

殺菌剤耐性菌研究会:

殺菌剤耐性菌研究会の第4回シンポジウムが4月6日、茨城県つくば市で開催され、以下の講演のあと、活発な質疑応答がなされた。

イネいもち病菌のカスガマイシン、有機りん剤耐性とその機構

1. イネいもち病菌の有機りん剤耐性の機構(宇部興産㈱ 上杉康彦氏)
2. イネいもち病菌のIBP耐性(長野果試 飯島章彦氏)
3. イネいもち病菌のイソプロチオラン感受性と寄生的適応性(日本農薬㈱ 廣岡卓氏・故宮城幸男氏)
ブドウ黒とう病におけるベンズイミダゾール系薬剤耐性菌の出現とその対策(佐賀果試 田代暢哉氏)
カンキツそうか病菌のベンズイミダゾール耐性とその防除対策(果樹試興津 家城洋之氏)

フェニルアマイド耐性の現状と対策

1. Experience with Phenylamide Resistance and Successful Countermeasures(スイス・チバガイギー社 T. Staub氏)
2. 日本におけるフェニルアマイド耐性植物病原菌の発生状況(JA全農 中澤靖彦氏)

なお、講演要旨集に残部があるので、ご希望の方は研究会事務局(果樹試病1研 石井英夫 TEL. 0298-38-6544)までご連絡いただきたい。(石井英夫)

平成7年度学会活動および関連学会の開催予定

・日本植物病理学会

創立80周年記念大会 平成7年3月30日 東京大学で開催

平成7年度大会 平成7年3月31日~4月2日 東京農業大学で開催

殺菌剤耐性菌研究会 平成7年4月3日 東京農業大学で開催

感染生理談話会 平成7年7月21~23日 静岡県浜名郡舞阪町 浜名荘で開催

細菌病談話会 平成7年 日程、開催場所は未定

・日本農薬学会

創立20周年記念大会 平成7年3月26日 東京大学で開催

平成7年度大会 平成7年3月27日～29日 東京農業大学で開催

・日本菌学会

平成7年度大会 平成7年5月27日～28日 昭和女子大学で開催

・日本応用動物昆虫学会

平成7年度大会 平成7年8月25日～28日 帯広畜産大学で開催

・日本ウイルス学会 平成7年10月31日～11月2日 岡山シンフォニーホール、岡山市民会館、岡山県総合福祉会館で開催

・土壤微生物研究会 平成7年5月25日～26日 科学技術庁研究交流センター（つくば市竹園2-20-3）

特別講演：渡辺 嶽（三重大学生物資源学部）

「土壤微生物の接種によって土壤微生物相は変えられるか」

シンポジウム：テーマ「微生物の環境導入とその技術的諸問題」

創立80周年記念事業の進捗状況

日本植物病理学会が平成7年に創立80周年を迎えるにあたり、各種の記念事業が計画されているが、その進捗状況は以下の通りである。

(1) 記念式典

日時：平成7年3月30日（木）9時半～12時

会場：東京大学安田講堂

式次第：式辞、来賓挨拶、学会支援団体への感謝状、特別講演；国立遺伝学研究所教授 太田朋子氏「遺伝子進化の機構」

(2) 記念シンポジウム

日時：平成7年3月30日（木）13時～17時

会場：東京大学安田講堂

課題：「分子植物病理学の現状と展望—病原性と抵抗性の分子機構—」

1) 病原性遺伝子の解析

講演者：上田一郎（北大農）、露無慎二（静岡大農）、林 長生（農研セ）

2) 宿主-病原体相互作用の分子機構

講演者：吉川正明（北大理）、白石友紀（岡山大農）、甲元啓介（鳥取大農）

3) 遺伝子操作による抵抗性植物の作出

講演者：米山勝美（明治大農）、難波成任（東大農）、川又 仁（茨城県生工研）

(3) 記念祝賀会

日時：平成7年3月30日（木）17時半～19時半

会場：東京大学中央食堂

(4) 植物病理学事典の発行

編集委員長：岸國平氏、同副委員長：日野稔彦氏、同幹事長：稻葉忠興氏を中心として編集が進められている。各分野の多くの学会員が分担執筆し、創立80周年記念事業にふさわしい内容豊富な事典が、7年春に養賢堂から発売される予定である。

学会関連の各委員からの報告

日本学術会議関連：

第16期日本学術会議会員として、日本農芸学会、日本応用動物昆虫学会、日本植物病理学会3学会の推薦で松中昭一氏（関西大）と三橋 淳氏（東京農工大）が、また、微生物学関連学会の推薦で三輪谷俊夫氏（岡山県立大）がそれぞれ選出された。

国際植物病理学会および植物病理学関連国際会議の報告と案内

(1) ISPP 便り

第7回国際植物病理学会議（7th ICPP）は1998年8月9日～16日に英国エジンバラで開催の予定で、現在、準備が進んでいる。今後、さらに詳しい情報を入手されたい方は下記にご連絡いただきたい。

Dr. Scott, P.R.

Chairman of the Organising Committee,
CAB International,
Wallingford, OX10 8 DE, UK.
FAX. +44-491-833-508
e-mail. CABI@CGNET. COM

(2) 関連国際学会の開催案内

- ・ International Symposium on Rhizoctonia : Noordwijkerhout, The Netherlands, 28 June-1 July, 1995.
- ・ 7th International Symposium on Microbial Ecology : San Paulo, Brazil, 27 August-1 September, 1995.
- ・ 第5回シュードモナス国際シンポジウム：分子生物学とバイオテクノロジー Fifth International Symposium on *Pseudomonas* : Molecular Biology and Biotechnology 研究発表募集

会期：平成7年8月21日（月）～8月25日（金）

会場：通商産業省工業技術院筑波研究センター共用講堂大講堂、筑波第一ホテル

主催：第5回シュードモナス国際シンポジウム組織委員会
(委員長：中澤晶子、山口大学医学部)

共催：*Pseudomonas* 研究会

発表形式：招待講演による各セッションと一般公募によるポスターセッション、招待講演と公募より選抜された演題によるワークショップより構成されます。

プログラム：

Opening Lecture

I.C. Gunsalus, O. Hayaishi, B. Holloway

Session 1. Biodegradation (1)

B. Witholt, E. Galli, V. Shingler, A.M. Chakrabarty

Session 2. Biodegradation (2)

P.C.K. Lau, M. Fukuda, D.D. Focht

Session 3. Molecular Genetics

D.Haas, V.de Lorenzo, S. Harayama

Session 4. Protein Structure

Y.Mitsui, S.G. Sligar, K.-E. Jeager

Session 5. Anaerobic Metabolism

R. Olsen, T. Imanaka, J. Tiedje, T. Kodama

Session 6. Cell Envelope and Drug Resistance

H. Nikaido, K. Poole, T. Nakai, S. Silver

Session 7. Transport and Signal Transduction

H. Ohtake, P. Williams, S. Lory, A. Lazdunski

Session 8. Pathogenicity

D.E. Ohman, V. Deretic, K. Okuda, B. Iglesias

Session 9. Plant-Bacterial Interactions

S.Lindow, F. O'Gara, C.A. Boucher, S.W. Hutcheson

Workshop 1. Evolutionary Engineering

J.L. Ramos, K. Furukawa, W. Reineke, S. Negoro

Workshop 2. Interesting Features of Pseudomonads

A.J. Weightman, M. Tsuda, T.G. Lessie, K. Horikoshi,

Y. Doi

Workshop 3. Bioremediation-application

K.N. Timmis, P.H. Pritchard, R. Unterman

Workshop 4. Medical Aspects

R. Hancock, J.S. Lam, T. Nakazawa, S. Iyobe

参加締切：5月31日

2nd Circular は Fax または郵便にて下記にご請求ください。

2nd Circular 申込先：

〒940-21 長岡市上富岡町 1603-1 長岡技術科学大学生
物系 福田雅夫 FAX. 0258-47-1950

会員の動静 (H.6.1~6.10)

(1) 大学関係

1) 人事

長谷 修 H 6.6 東北大 農学部 植物病理学講座

助手

今津道夫 H 6.4 筑波大 農林学系 助手

日比忠明 H 6.1 東京大 農学部 植物病理学講座

教授

高橋英樹 H 6.5 東京農工大 農学部 植物病理学
講座 助手

後藤正夫 H 6.3 静岡大 農学部 植物遺伝資源学
講座 教授（退職）

露無慎二 H 6.4 静岡大 農学部 植物遺伝資源学
講座 教授

宮田義雄 H 6.3 京都府大 農学部 植物病学講座
助教授（退職）

久保康之 H 6.8 京都府大 農学部 植物病学講座
助教授

中屋敷均 H 6.6 神戸大 農学部 植物病理学講座
助手

伊藤真一 H 6.5 山口大 農学部 生物生産科学講
座 助教授

秋光和也 H 6.9 香川大 農学部 植物病学研究室
助教授

杉浦巳代治 H 6.3 九州大 热帯農学研究センター
作物生産部門 教授（帰任）

佐古宣道 H 6.4 佐賀大 農学部 農学部長

2) 学位取得者（課程博士）

菅野善明 H 6.3 岩手大 農学博士 ホップのウ
イルスに関する研究

長谷 修 H 6.3 東北大 農学博士 キュウリモ
ザイクウイルス感染タバコ葉に
おけるウイルスゲノムの増殖解
析

蘆 聖煥 H 6.3 東京大 農学博士 アズキモザ
イクウイルスに関する研究

上野ベルナルド H 6.3 東京農工大 農学博士
トマトかいよう病細菌の病原性
因子に関する研究—とくに菌体
外多糖類と組織軟化酵素につい
て

Triwidodo, A. H 6.3 岐阜大（静岡大） 農学博士
Studies on biological control
of tomato bacterial wilt with
an avirulent strain of *Pseudo-
monas solanacearum*

Jhoncon, K.J.H. H 6.3

岐阜大（静岡大） 農学博士
Characterization of a clone
encoding multiple polygalac-
turonases from *Erwinia car-
otovora* subsp. *carotovora*

渡部光朗 H 6.1 京都府大 学術博士（農学） イ
ネ白葉枯病菌の病原性因子に関
する研究—とくに病徵発現の場

における菌体外多糖質の役割について			研究室長
Urashima, A.S.	H 6.3	神戸大 学術博士 Etiological studies on wheat blast disease caused by <i>Magnaporthe grisea</i> .	小金沢碩城 6.8 四国農試 生産環境部 病害研究室長
伊藤靖夫	H 6.9	鳥取大 農学博士 Gene tagging in <i>Penicillium paxilli</i> .	・指定試験 中島敏彦 H 6.4 福島県農試 病理昆虫部
吉田克志	H 6.3	愛媛大 農学博士 アブラナ科植物べと病菌の感染機作に関する組織化学的ならびに生理学的研究	築尾嘉章 6.4 富山県野菜花き試 病理昆虫課
権 純培	H 6.3	佐賀大 農学博士 タバコモザイクウイルス・ラッキョウ系の病原学的研究	・新規採用 大平有紀 H 6.10 農研セ 病害虫防除部 ウィルス病診断研
Bhuiyan, M.K.A.	H 6.3	鹿児島大 農学博士 イネ赤色菌核病菌の病理・生理学的研究	森脇丈治 6.10 農環研 微生物管理科 微生物特性・分類研
3) 海外長期出張者			芦沢武人 6.10 東北農試 水田利用部 水田病害研
高橋英樹	東京農工大	H 6.6-H 7.5 USA ワッカスマン研究所	吉田隆延 6.10 ノ 畑地利用部 畑病虫害研
児玉基一朗	鳥取大	H 6.2-H 6.12 USA コーネル大学	安田伸子 6.10 北陸農試 水田利用部 水田病害研
(2) 農水省研究機関関係			2) 海外長期出張 石黒 潔 農研セ H 4.11-6.11 USA, コーネル大学
1) 人事			竹中重仁 北陸農試 6.1-6.12 USA, フロリダ大学
・室長以上			加藤雅康 北農試 6.11-7.10 USA, コーネル大学
松本省平	H 6.3	退職 (農研セ 総合研究官)	中島 隆 東北農試 7.3-8.2 カナダ, レスブリッチ農試
日比忠明	6.1	東京大学出向 (生物研 企画科長)	
大槻義昭	6.1	生物研 企画科長	
鈴井孝仁	6.3	退職 (生物研 遺伝資源調整官)	
美濃部侑三	6.3	生物研 遺伝資源第一部長	
小泉銘冊	6.1	果樹試 興津支場長	
尾崎克己	6.4	ノ 口之津支場 病害研究室長	
柳瀬春夫	6.10	ノ 場長	
工藤 晟	6.10	ノ 口之津支場長	
梅川 学	6.10	ノ 安芸津支場長	
手塚信夫	6.4	野茶試 研究技術情報官	
堀内誠三	6.4	ノ 盛岡支場 病害研究室長	
我孫子和雄	6.5	ノ 環境部 病害第2研究室長	
野村良邦	6.4	東北農試 畑地利用部 畑病虫害研究室長	
山本 剛	6.3	退職 (北陸農試 病害研究室長)	
藤田佳克	6.4	北陸農試 水田利用部 病害研究室長	
山本孝彌	6.8	中国農試 生産環境部 発病機構	
(3) 県農試関係 (H 5.6-H 6.6, 植物防疫全国協議会の会員名簿より)			
嶋田慶世	青森県農試	病虫肥料部長	
小沢竜生	岩手県園試	場長	
武田真一	岩手県農試	環境部長	
井沢弘一	山形県農試	場長	
大沼幸男	ノ	病理昆虫部長	
高橋昭二	ノ	庄内支場 環境部長	
田中 孝	ノ 園試	環境部長	
橋本 晃	福島県農試	副場長	
千葉恒夫	茨城県園研	病虫研究室長	
飯島 勉	東京都農業試験場	場長	
広間勝巳	長野県南信農業試験場	環境部長	
谷口達雄	鳥取県園試	環境研究室長	
貞野光弘	徳島県果樹試	病虫科長	
和泉勝一	鹿児島県農試大島支場	病虫研究室長	
坂口徳光	ノ 果樹試	病虫研究室長	
各種出版物案内			
(1) 学会出版物			
・日本植物病理学会会員名簿 平成6年11月, 價格2,000円			
・日本有用植物病名目録 第2巻 (野菜および草花) 第3版, 平成5年12月, 價格4,000円			
残部がありますので学会事務局へお申込み下さい。			

・日本植物病理学会報総目次

第21～第50巻(1956～1984), 平成5年9月, 価格2,700円

残部がありますので学会事務局へお申込み下さい。

(2) 会員の出版物

- ・江原淑夫, 生越 明, 土崎常男, 道家紀志, 古澤 巍, 脇本 哲著: 総説植物病理学, 養賢堂, pp. 457, 1994, ¥6,695.
- ・宍戸 孝ら編: 農薬科学用語辞典, 日本植物防疫協会, pp. 374, 1994, ¥7,500.
- ・大木 理著: 植物と病気, 東京化学同人, pp. 201, 1994, ¥1,300.
- ・Kohmoto, K. and Yoder, O.C. eds.: Host-specific toxin: Biosynthesis, receptor and molecular biology, Tottori Univ., pp. 313, 1994.

(残部僅少: お問合せは Fax で直接下記へ

FAX. 0857-31-5347 鳥取大学農学部植物病理学研究室内 鳥取HSTシンポジウム事務担当)

- ・Watanabe, T.: Pictorial atlas of soil and seed fungi, Lewis publishers, pp. 411, 1994.
- ・江塚昭典, 安藤康雄著: チャの病害, 日本植物防疫協会, pp. 440, 1994, ¥6,500.

会員の意見

(1) 学会ニュースの発行を喜ぶ

心待ちにしていたニュースの発行をお慶び申し上げます。年に1回定期総会が開かれますが、出席者は会員の3割にも満たず、学会報に載る学会記事もどの位の人が読んでいるかわかりません。学会を運営する役員の仕事の中身について多くの会員は知らないと思います。

ニュースにこの隙間を埋め学会と会員を結ぶ役割を期待するものです。

そこで、2, 3注文を。

- ① 最初は記事が多いでしょうが、あまり欲張らず、長続きさせることが重要。
- ② 学会役員の活動状況を「編集後記」などの形で載せてはいかが。
- ③ 海外情報は勿論、在日外国人の声なども載せてはどうか。
- ④ 近い将来ニュースを別冊にし、それだけを購入する会員制度を作れば、会員の裾野が広がると思います。

(果樹種苗協会 山口 昭)

(2) 本年3月までの2年間、学会幹事としてお手伝いさせて頂く機会に恵まれた。正直なところ、それまでの私は、学会の運営についてはほとんど意識したことがなかった。

しかし、会計幹事になってみれば、会費納入の状況が大

層気になる。各会員の元へ直接集金に伺いたくなるほど! であった。また、普段より多くの人に出会い、広い範囲の研究に関心を持つようになってしまった。特に、よりインパクトのある学会報を目指した議論を通して、いろいろな意見に接した事が印象に残っている。また、ファックスなどの機器の活用が進み、思ったほどは時間を取られなかつたのも良かった。

私たちは普段、あまり乗り気でない仕事を雑用という一言で片付けてしまう。幹事役も雑用と言えば雑用なのかもしれない。しかし、今思うと、1回位なら経験してみるのも悪くはない、意外に勉強になる雑用だったようだ。

(東京農大 夏秋啓子)

情報提供及び投稿のお願い

編集方針で示したように、ニュースでは会員の動静、著作、植物病理学関連の会合やシンポジウム等に関する情報を広く会員に提供したいと考えていますので、情報をご提供下さい。また、学会に関するご意見(400字以内)や海外留学の印象等(800字以内)もご投稿下さい。

情報の提供や投稿先:

〒170 東京都豊島区駒込1-43-11 植防ビル
日本植物病理学会事務局 ニュース編集委員会
TEL. 03-3943-6021

学会事務局コーナー

学会へのご意見、ご希望事項が皆様から寄せられています。ここではこれらの主なものについて紹介します。

1. Washington州立大学Mink博士の名誉会員になった件をAPPSニュースレターに送稿してはどうか。(連絡しました。)
2. 会員の訃報について、一般の会員は記事のコラムに氏名が載るだけですが、数行の略歴を記述するなど、もう少しスペースを割いては如何か。
3. 科研費の審査員、配分結果を学会報を通じて積極的に公開してほしい。
4. 会報の合体ファイル(「植物防疫」のようなファイル)を作ってほしい。
5. 名簿にInternetの電子メールアドレスを載せてほしい。
6. 名簿刊行形式の一つとして、フロッピーディスクによるテキストデータベース形式を希望する。
7. 本誌を「Current contents」に送るようにしてほしい。(Current contentsから送付の依頼があり、平成6年8月に発送しました。)
8. 高年齢会員用として、他学会に準じてシニア会員制度を導入してほしい。

以上のご意見、ご希望について即座に対応できるものに

については、幹事会で検討後対処しました。その他貴重なご意見、ご希望については学会員の皆様によりよく反映できるよう検討していきます。今後ともご意見があります場合は学会事務局へご連絡下さい。

編集後記

会長を始め多くの会員の方々のご協力により、ニュース第一号を発行することができました。内容はまだまだ不十分だと思いますので、皆様のご協力により、内容を充実させて行きたいと思います。2年間の試行ということですので、2年後に発行を続けて行こうという声が出るよう努力したいと思います。（土崎常男）
